

**Eric Reuland,**  
*Anaphora and Language Design*

Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 2011. xix + 437pp.

---

槇田裕加

---

## 1. はじめに

GB理論では、束縛現象は統率 (government) にもとづいて以下のように定義されてきた。

- (1) A 照応形はその統率範囲内で束縛される
- B 代名詞形はその統率範囲内で自由である
- C R表現は自由である

しかしながら、1990年代以降提唱されているミニマリストプログラムでは、統率、さらには照応形と先行詞の依存関係を表す指標 (index) は概念的必然性を欠くという理由から仮定されていない。このため、近年では、一致 (agreement)、探索子・目標 (probe-goal) 関係、フェイズ (phase) にもとづいて(1)に示す照応形と代名詞の分布を捉えようとする分析が主流となっている。これに対し、本書では、再帰性の本質を論理的な視点を交えて議論した上で、述語の語彙的な特性、一致、連鎖 (chain) といったミニマリストプログラムで認められている極めて基本的な操作、素性等によって照応形の分布を捉えることができると主張している。

本書の構成は以下の通りである。1章では、本書の目標を明確にし、それに対する主張を簡潔にまとめている。2章から8章では、Reinhart and Reuland (1993) によって提案されているA束縛と連鎖にもとづいた分析を、ミニマリストプログラムの精神に則したより洗練された形に定義し直し、これらがどのように束縛現象を捉えることができるのかを議論している。9章は結語である。

紙面の都合上、以下の節では、本書の軸となるA束縛と連鎖がどのように機能するのかを概観し、本分析の問題点を指摘していく。

## 2. 統語レベルで扱うべき束縛現象とは

本書では、再帰形が生じうる環境を明確にするため、述語の項構造及び述語の語彙的な特性について(2)~(4)を仮定している。

(2) (A) A reflexive-marked syntactic predicate is reflexive.

(B) A reflexive semantic predicate is reflexive-marked. (Reuland (2011: 83))

(3) a. The *syntactic predicate* formed of (a head) P is P, all its syntactic arguments, and an external argument of P (subject). The syntactic arguments of P are the projections assigned  $\theta$ -role or Case by P. (*op. cit.*, p. 82)

b. The *semantic predicate* formed of P is P and all its arguments at the level of logical syntax.

(4) A predicate (formed of P) is reflexive-marked iff either (i) P is lexically reflexive or (ii) one of P's arguments is a SELF anaphor. (*ibid.*)

本節では、(2)の条件Aと条件Bがどのように機能するのか、どのような現象を捉えることができるのかを順に概観していく。

最初に条件Aを考察していこう。例えば、The caterpillar<sub>1</sub> admire himself<sub>1</sub> では、動詞 admire は主語 the caterpillar と目的語 himself に  $\theta$  役割を付与しているため、これらは統語的述語を形成している。さらに、2つある項のうち1つがSELF照応形であり、(4ii)を満たしていることから照応形が容認される。このように、照応形が容認される環境を動詞とその項構造にもとづいて分析するのであれば、束縛現象に観察される局所性 (locality) は自ずと導き出されることになる。

また、この条件Aに従うと、(5a)と(5b)の対比は次のように捉えることができる。

(5) a. \*Max boasted that the queen invited himself for a drink.

b. Max boasted that the queen invited Lucie and himself for a drink.

(*op. cit.*, p. 88)

(5a) では, the queen, invited, himselfは統語的述語を形成しているが, 先行詞となる the queenと himselfは人称が一致しないため, 非文法的となる。一方, (5b) では, 動詞inviteの目的語はLucie and himselfであって himself単独ではないため, the queen, invited, himselfは統語的述語を形成しない。このように統語的述語を形成しない場合には条件Aは適用されず, 照応形の先行詞の決定は談話レベルに持ち越されて発話主体指向的 (logophoric) な照応形として解釈される。なお, (5a) のように, 統語レベルで排除された照応形は談話レベルで解釈し直すことはできない。本書では, これを経済性 (economy) の観点から議論している。

では次に, 条件Bを考察していこう。条件Bにおける意味的に再帰的な述語とは, レキシコン (Lexicon) においてすでに再帰性が備わっている述語を指す。例えば, オランダ語の *schaamte* ‘shame’ (目的語が照応形でなくてはならない) や *wassen* ‘wash’ (目的語が照応形でない場合にも再帰的な解釈を伴う) は語彙的に再帰性を備えているため, SELF照応形による再帰標示は不要である。これに対し, *bewonderen* ‘admire’ にはこのような特徴はみられないため, 項の1つをSELF照応形とすることで再帰標示しなくてはならない。

(6) a. Willem<sub>i</sub> schaamt zich (??zelf)<sub>i</sub>

William shames SE

b. Willem<sub>i</sub> wast zich (zelf)<sub>i</sub>

William washes SE

b. Willem<sub>i</sub> bewondert zichzelf<sub>i</sub> / \*zich<sub>i</sub>

William admires SEself/SE

(*op. cit.*, p. 104)

照応形にはSELF照応形の他にSE照応形もあるが, (4) に示すように, 再帰化機能を備えているのはSELF照応形のみである。このため, (6a, b)において, SE照応形が表れたとしても何ら問題はない。

このように, 条件Aと条件Bは統語レベルで扱うべき束縛現象を明確にし, 尚且つ, SELF照応形とSE照応形の分布を捉えることができる。しかしながら, 照応形と先行詞がどのように依存関係にあるのかについては何も言及していない。3節で概観するように, これについては索性照合とそれによって形成され

る連鎖が大きな役割を果たすこととなる。

### 3. 素性照合によって束縛関係を捉える

通常、連鎖は移動によって形成されるが、本書では、以下の条件を満たす場合に限り、素性照合もまた連鎖を形成すると主張している。

(7)  $(\alpha, \beta)$  form a Chain if (i)  $\beta$ 's features have been (deleted by and) recovered from  $\alpha$ , and (ii)  $(\alpha, \beta)$  meets standard conditions on chains such as uniformity, c-command, and locality.

(8) If  $(\alpha, \beta)$  is a Chain and both  $\alpha$  and  $\beta$  are in A-positions,  $(\alpha, \beta)$  is an A-Chain.

(*op. cit.*, pp. 151-152)

ここで、本書に従い、オランダ語のSE照応形がどのように先行詞と束縛関係を結ぶのかを考察していこう。(議論に関わらないため、動詞句内の構造は簡略化してある。)

(9) [<sub>TP</sub> Subj [<sub>T</sub> FF<sub>SE</sub>-V-T [<sub>VP</sub>  $\wedge$  SE ]]]

ここでは、①目的語であるSE照応形の素性 (FF<sub>SE</sub>) が格照合のためにVへLF移動する、②オランダ語は顕在的なV移動が適用される言語であるため、FF<sub>SE</sub>は実質的にはTへ移動したVへ付加するという2点がポイントとなる。では、(9)の派生を順に追っていこう。[Spec, TP]へ移動した主語はTの解釈可能な $\phi$ 素性を照合する。次に、FF<sub>SE</sub>が格照合のためにV-TへとLF移動する。SE照応形は $\phi$ 素性の中でも3人称素性のみを持っており、V-TへLF移動することによって、主語からこの3人称素性が可視的となる。このため、主語はTに付加したFF<sub>SE</sub>の3人称素性を照合、削除する。ただし、名詞句の人称素性は解釈に必要なため、後に復元される。この一連の素性照合により、主語とFF<sub>SE</sub>の関係は(7)と(8)を満たしているため、(Subj, FF<sub>SE</sub>)は連鎖として認可される。このように、素性照合によって連鎖(Subj, FF<sub>SE</sub>)を形成することで間接的に主語とSE照応形を結びつけることができ、両者の依存関係を捉えることが可能となる。

#### 4. 今後の展望と課題

先に述べたように、近年、束縛関係を一致、探索子・目標関係、フェイズにもとづいて捉えようと試みる分析が多数提案されている。しかしながら、本書はただ闇雲に最新の理論を取り入れようとするのではなく、再帰性とはどのようなものなのか、束縛現象を素性照合といった一般性の高い操作や特性からどのように導き出すことができるのかを十分に議論している。この議論の厚みは、長年、束縛現象を研究し続けてきた著者だからこそ成し遂げられることであり、それ故に説得力がある。

ただし、3節で概観した素性照合についてはいくつか問題点も残る。例えば、Tへ移動したFF<sub>SE</sub>の3人称素性は解釈可能な素性である。このため、たとえこの移動がV-Tへの付加であったとしても、主語から可視的とはならず、それ故、素性照合の対象とはならないはずである。また、一旦削除した素性を復元することに理論的な問題がないのか、素性照合による連鎖を特別扱いすることにはならないのかも疑問である。

さらに、主語と目的語（の素性）を連鎖を通して関連づけるためには顕在的なV移動が適用されなくてはならないが、英語のように顕在的な動詞移動が適用されない言語では、照応形の素性が格照合のためにTまで移動する動機付けがない。これについては著者も苦しまぎれに説明を試みているが、いずれも説得力に欠け、ここでいくつもの仮説を立てることは、よりシンプルに束縛現象を捉えようとする本書の目標が揺らぐことにもなる。

とは言え、ミニマリストプログラムの枠組みにおいて束縛現象を根本的に見直し、「束縛現象には特別な原理等は必要ない」とする立場を追求し続けることは大いに価値がある。今後、どのように洗練された分析となるのか、さらなる展開が楽しみである。

#### 参考文献

Reinhart, Tanya and Eric Reuland. 1993. Reflexivity. *Linguistic Inquiry* 24, 657-720.